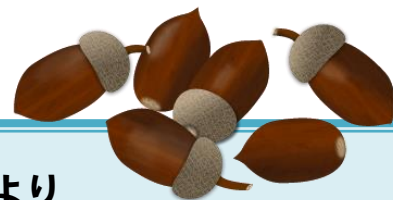


参加スタッフからひとこと



吉田コーチ（マネージャー・スイミング・おとな水泳）より

「本質」を痛切に感じた研修会でした。
現在1歳3カ月になる娘がいますが、基本やりたい事をさせ、そこからの経験から色々な事を学びとって欲しいと思っているのですが、ついつい規制の言葉を発している自分がそこにいることのギャップを感じています。「待つ」ことも同じです。もっともっと大きなココロで接していきたいと思います。では、水泳指導に置き換えた時はどうなのか？決められた時間の中で、次のステップへ進めていくために本来あるべき姿からはほど遠い、押し付けでしかない、子ども本来が持つ能力を指導という言葉で押さえ込んでしまっているのではという疑念が湧いてきます。このあたりについて、今後の課題としてどうあるべきなのか先生とのミーティングの中で考えていきたいと思います。

奥村コーチ（マシジム・スイミング・おとな水泳）より

研修内で出てきました、子どもの“反抗期”は反抗しているのではなく自立をしようとしている“自立期”だという考えに感銘を受けました。確かに親や大人は自分たちに都合のよい、扱いやすい、言う事の聞く子を『良い子』と思っているかもしれませんが、結局そういう子は自分で考えたり判断する力が乏しく、言われたことしかできない人間に育っていくのかもしれませんが。我々、コーチ陣も自分達の「子どもたちを見る目」や「子どもたちに対する考え方」次第で子どもたちとの関わり方が大きく変化すると思いますし、子どもたちの反応も変わってくると思いますので、今後も勉強して視野を広げていきたいと思います。

谷口コーチ（体操教室・マシジム・エアロビクス・水中運動）より

私は家業で和太鼓の修行を25年以上にわたって積んできています。その「芸」とは何か。「本質」とは何か。ということを追って現在に至ります。今回、「物事の本質」について話しができました。私は日常生活の中でも意識的に「本質を見抜く」ということをよく考えます。「地位・名誉・知名度・人気度・うわさ」こういったことが高い水準にあればあるほど、「一流」とされている世の中です。「スポーツクラブ・フィットネスクラブ・スイミングクラブ」の本質について追及する必要性のお話しがありました。そのようなことについて考えたことはありません。現在の日本に「フィットネスクラブの在り方」について本質を考えて行くと見えてくるものがあると信じていますので、今後の話し合いが楽しみです。

小山コーチ（スイミング・おとな水泳・水中運動）より

2歳の我が子の子育てで、少し気が楽になりました！

先生のお話によると、日本の学者がつけた『反抗期』という言い方に、そもそも問題があるとの事です。反抗期という言い方をすると、親は「いい子にしなければ」と不安になってしまいます。『反抗期』ではなく、自分で考え、行動するための『自立期』であり、成長過程において、とても大切な時期となります。『反抗期』と『自立期』。言い方だけのことも知れませんが、これだけでも親の負担は減ったような気がします。実は、息子がまさに2歳半の反抗期にあたりますが、今日からは、自立期として接していこうと思います。本来、子どもの成長は、親にとって「苦痛」ではなく、「ウェルカム」であるはずですね。

鳥本コーチ（十坪ジム）より

今は、十坪ジムを中心に指導をさせていただいておりますので、そこでの指導方法についての考え方が主になります。十坪ジムでは、受講生の方に、1週間に1回70分間のレッスンをしていただいております。そのため、我々が関わることが出来るのも基本的に70分しかありません。その中で、十坪ジムの特徴である、正しい身体の動かし方というものをイメージさせることと同時に、その方の生活にどう影響するかを考え指導させていただいております。週1回のトレーニングの時間だけでなく、残りの6日間をどのように意識して過ごしていただけるかが大切になりますので、レッスン中の会話や、タイミングに悩みながらも、気をつけて行っています。

十坪ジムは、運動が苦手な子、生まれつき身体にハンデ（障がい）がある子も多く来ています。その子ども達に、運動をしながら向き合う難しさを日々痛感しながら、継続することを念頭において、指導にあたっております。

北山コーチ（マシンジム）より

研修会の冒頭から、先生の経歴・経験のお話が続きましたが、大学での講義の中で、学生たちの和気あいな姿に、「笑いごとではないのだけれどね」と言われた事が、印象に残っています。私の気持ちを見透かされているようで恥ずかしいと思いました。

町田コーチ（十坪ジム）より

子どもの「反抗期」は「自立期」と言い換えることで、全く違ったものになるとの言葉に、たいへん驚かされました。単なる言葉の言い換えだけでは片付けられない深い意味を感じさせられました。「反抗」という大人側からの一方的な見方で定義付けされている社会、それは日本社会の未成熟さを突きつけられた思いでした。子どもが安心していられる場所。自立し、生きる力をつける場所。高齢者が、その長いキャリアを、そのまま認められ、それを次の世代に伝えられる場所。彩華スポーツクラブが、そのような場の1つであって欲しいと思っております。





武田コーチ（体操教室）より

スタッフとしてだけでなく、どちらかと言えば保護者としての立場でお話を伺い頂きました。先生の言葉にあった、「子どもの一步後ろからついて行く。教えるのではなく**育む**。待つのが**仕事**。**育む**というのは待つという事」。理解しているつもりでいましたが、できてはいませんでした。また「反抗期ではなく自立期」。この言葉に救われました。自分が子育てとしての目的である「子どもの自立」。子どもたちはそれに向かって進んでくれているのだと感じることができました。「子どもは家庭だけでは育たない」。この言葉にも救われた気がします。この「育たない」の意味は深いですね。先述したように子供は勝手に大きくなります。しかし、育み、成長させることは親だけでは限界があると思いますし、私もそう感じます。そして、属という「育てる」ということは基本的に親の責任ですが、「育む」ということは誰にでもできますね。だから、近所のおじさんおばさん、学校の先生、そして私たちのように子どもと接する仕事をしている大人たちが子どもと関わっていくこと、そして、その関わり方が重要なのだと改めて感じました。

大城コーチ（マシンジム・体操教室・ピラティス）より

フィットネスクラブに限らず、どんな職場や仕事であっても、損得が先にあってはならず、お客様の「ニーズ」と「ウォンツ」ありきと、私も考えます。次回の勉強会は、そのあたりの具体的なお話を伺えたらと思います。

吉住コーチ（十坪ジム）より

不登校のための水広場のお話をお聞きしましたが、スイミングスクールに通っている子どもたちは不登校とまでいかななくても 大なり小なり悩みや不安を持っています。親御さんも「水泳が上手になってほしい」とか「水泳選手になってほしい」ではなくもっと他の目的・望みを持って子どもを入会させる方も多いのではないのでしょうか？今のスイミングクラブの実情をあまりよく知らないのですが、そんな親御さんや子どもたちに満足していただけるクラブであればと思います。

安井コーチ（マシンジム・十坪ジム）より

1番心に残ったことは、「**育む**=待つ」ということです。なぜなら、私自身が「ほったらかし育児」なので、子どもたち自身に任せている部分が多く、そのために自分達で考え成功もするけれど、失敗もたくさんしています。このように、待っている事が多い気がするので、先生がそのようにおっしゃられていた事と、割と似ているのかなと感じています。何もかも手を貸すのではなく、子ども自身が考え、行動を起こし、失敗したとしても、その失敗を受け止め、そこからどうしていくか・・・それに自分で気づいて欲しいと思うので、日々子どもとの我慢くらべをしている気がします。

古江さん（総務）より

研修会の中で、何度となく出てきた「本質」という言葉。これを解釈することは、今回の研修会では完全には出来ませんでした。研修が進むにつれて、その意味を考えられるようになっていました。本質を知らず、うわべだけの生き方、考え方で、仕事も子育てもやってきた自分を反省しましたが、未だに自分をどう変えていくべきなのかは、はっきりとしたものがあるわけではありません。まずは、仕事に対する気持ちと、家庭でも子どもに対する考え方を改めてみたいと思っています。

池田さん（フロント）より

フロントにいますと、保護者の方から、いろいろな相談を受けます。「なかなか上手にならない」「行くのを嫌がる」などなど。私も子を持つ親として、最初は楽しく通ってくれたらそれでいいと思っていたはずが、通わせているのだから、上手になって欲しいと、どんどん親の要求が高くなってしまいう気持ちですごくわかります。技術の上達ばかりを望んでしまいがちですが、それ以外のところで、きっといろいろな成長をしているはず。その部分に、目を向けていけるように、そして見守る気持ちを大切にしたいです。子どもが生まれた時に、「健康でさえいてくれたらいい」と思っていた気持ちを思い出しました。

藤田さやかさん（フロント）より

「反抗期」ではなく、「自立期」というお話が心にとまりました。ちょうど第2次自立期である小2の娘とロゲンカになる事も少なくないのですが、先生のお話を聞かせて頂いてからは、「娘は反抗期ではなく、自立期！成長の証！！」と冷静になれるようになりました。またフロントでご入会説明をする時に、ついつい私の方が一方的になってしまいがちですが、一歩引いて、新しい会員の方が何を求めているかを見極めたり、話やすくする事も、フロントスタッフの役割であると改めて思いました。

北澤さん（フロント）より

スイミングスクール・体操教室をはじめとするスポーツクラブ全般に言える事ですが、「スクール」「教室」と名前が付くと、保護者に限らず、ほとんどの方が、「教えてくれるところ」と感じると思います。その教えてくれる内容は、水泳で言えば4泳法であったり、体操で言えば、逆上がりや跳び箱であったり、その「やり方」を教えてくれる場所という認識をされていると思います。しかし、スポーツクラブの「本質」は、先生がお話された通り、「子ども自身が内面で成長すること」なのではないかと思いました。「子どもが、他の子どもを認知し、コミュニケーションの取り方を学ぶこと」。我々スタッフは、それぞれの教室で、そのお手伝いをする事だと私は感じました。

藤田牧子さん（栄養士・フロント）より

私にとっては、「クラブ運営や再生」などというテーマは大きすぎて自分の位置からは遠いもののように感じてしまっていますが、今回先生のお話を聞いていく中で、自分の経験や日常に重ねて物事を考えていたのではないかと思います。「1人1人が生かされ生きる」・・・本当にそうあるべきだと思います。

また、子は親の背中を見て育つと言われていますが、お話の中で1番心に響いたのは、「育む」とは、1歩後に行く事、「待つ」事であるというお話です。自分自身の子育てを振り返ってみると、子どもが小さい頃は、正面から目を見て話したり、教えることが多いのに、大きくなるにつれ、子どもも少しずつ自立し、離れたところから、あるいは、ふと見た後姿から成長を感じる事が多いと感じています。

山崎さん（総務）より

佐野先生の功績は、多くの分野を手掛けておられ、その一つ一つが点となり線で結ばれ、大きな一つの分野になっているように感じました。約20年前、阪神大震災は、兵庫県の経済や人々の価値観を大きく変えました。サービス業としてのスポーツクラブは、どうしても後回しにされます。しかしそんな時こそ、芸術やスポーツは人々の心の支えになっていくと私は考えています。

